

静岡市の公立高校の再編の必要性について

2026年4月9日

今回の発表の背景と目的

- ・2026年3月31日、難波市長と中村教育長が会見を開き、「静岡市立の高等学校の設置に関する将来の方向性」について説明をしました。
- ・その内容は、「今後、ますます加速する少子化の厳しい現実を直視し、静岡市は静岡県による市内の公立高校14校の再編の動きと歩調を合わせ、現在の市立高校(静岡市立高校と清水桜ヶ丘高校)を再編して中等教育学校という中高一貫校1校を新設する予定である」というものでした。
- ・新しい学校の具体的内容については、今後1年間をかけて、地域全体の教育環境の最適化を目指してさらに検討を行います。2校の伝統や実績を引き継ぎ、さらに静岡市独自の理念を持った魅力のある新しい学校づくりを計画していきます。
- ・一方で、3月31日の説明は、「今、なぜ、市立の2つの高校の再編が必要なのか」についての説明が不十分で、「中等教育学校を設置する予定」という説明が中心だったため、突然の発表と感じられ、不安やご心配をおかけすることになってしまいました。この点について、お詫びいたします。
- ・静岡市としては、将来の高校生人数が大きく減少することから、市立高校の将来をどうすべきかについて強い危機感をもちつつ、時代が変化する中で、市立高校の学びの内容はどうあるべきかについて考えています。
- ・本日は、本来であれば初めにお伝えすべきであった、「今、なぜ、市立の2つの高校の再編が必要なのか」について説明をします。

目次

- 1 公立高校の配置・設置についての県・市の役割
- 2 公立高校を取りまく状況と将来
- 3 再編についての県の検討状況
- 4 市立の高校の在り方についての市の検討経緯と考え方
- 5 今後の進め方

1 公立高校の配置・設置についての県・市の役割

1-1 公立の高等学校の適正配置等に関する 県、市の役割

1 根拠法令1:公立高等学校の適正配置及び教職員定数の標準等に関する法律

第四条（公立の高等学校の適正な配置及び規模）

都道府県は、高等学校の教育の普及及び機会均等を図るため、その区域内の公立の高等学校の配置及び規模の適正化に努めなければならない。
この場合において、都道府県は、その区域内の私立の高等学校並びに公立及び私立の中等教育学校の配置状況を十分に考慮しなければならない。

➡ 公立の高等学校の配置及び規模の適正化は、県の役割。
その際、私立の高等学校並びに公立及び私立の中等教育学校の配置状況を十分に考慮。

2 根拠法令2:教育基本法(地方公共団体と私立学校との関係)

教育基本法 第八条（私立学校）

私立学校の有する公の性質及び学校教育において果たす重要な役割にかんがみ、国及び地方公共団体は、その自主性を尊重しつつ、助成その他の適当な方法によって私立学校教育の振興に努めなければならない。

➡ 地方公共団体は、私立学校教育の振興に努めなければならない。

3 根拠法令3:学校教育法(市立の高等学校・中等教育学校の設置の根拠)

学校教育法 第四条

次の各号に掲げる学校の設置廃止、設置者の変更その他政令で定める事項(次条において「設置廃止等」という。)は、それぞれ当該各号に定める者の認可を受けなければならない。(中略)

二 市町村(中略)の設置する高等学校、中等教育学校及び特別支援学校 都道府県の教育委員会 (中略)

④ 地方自治法(昭和二十二年法律第六十七号)第二百五十二条の十九第一項の指定都市(以下「指定都市」という。)(指定都市が単独で又は他の市町村と共同して設立する公立大学法人を含む。)の設置する高等学校、中等教育学校及び特別支援学校については、第一項の規定は、適用しない。この場合において、当該高等学校、中等教育学校及び特別支援学校を設置する者は、同項の規定により認可を受けなければならないとされている事項を行おうとするときは、あらかじめ、都道府県の教育委員会に届け出なければならない。

- 政令指定都市になる前に設立した市立の高校は県の認可を受けて設置
- 政令指定都市になった後に設置した清水桜が丘高校は県教育委員会に届出し設置
(形式上は、静岡市の判断により設置可能であるが、実態は県との十分な協議・連携が必要)

1-2 静岡市が市立高校を設置する意義(市の役割)

(1) 静岡市が高校を設置・維持する法的な責任

- 市は、県教委による域内の公立高校の配置や規模の適正化の枠組みの中で、供給の一翼を担ってきた。
- 法令によると、政令指定都市静岡市は、独自の判断で高校を設置することはできるが、必ずしも設置・維持しなければならないものではない。

(2) なぜ、市が市立の高校を設置したのか。(注:この市は、旧静岡市、旧清水市)

市立の高校を設置した当初は、県立高校の供給量が需要量(高校で学びたいと考える市民)に対し十分でなかったため、社会的ニーズに応える形で市が学校を設置したと思われる。(注)

(注:普通科、商業学科に入りたいが定員が少なく、入りにくい状況に応えるもの)

(3) 設立から現在までの功績

市立の高校はその長い歴史の中で、多くの人材を輩出し、静岡市の発展にも寄与してきた。そして、現在も多くの市民から愛されている学校である。

(4) 人口減少がより進む将来において、今後の市が高校を持つ意義

・市には設立当初のような「量的な供給量を確保する観点からの学びの保障の役割」は求められていない。

・市・市民が求める人材(資質・能力・知識)の育成のための「質的観点からの学びの保障の役割」が、今後、市が高校を持つ意義となる。(質的な供給責任)

静岡市立高等学校

- 昭和 14 年(1939 年) 静岡市議会において市立中学校の設置決議、創立委員会設置
定員 1,000 名(20 学級)静岡市立第一中学校設立認可
- 昭和 15 年(1940 年) 静岡市立千代田尋常高等小学校の一部を仮校舎として授業開始
- 昭和 16 年(1941 年) 木造二階建て校舎一棟完成移転
- 昭和 17 年(1942 年) 各種学校令による静岡市立第二中学校(夜間)を併設
(200 名4学級)
- 昭和 23 年(1948 年) 学校教育法の規定により静岡市立第一中学校及び第二中学校を
併せて静岡市立高等学校とし、全日制・定時制の両課程設置、全日
制定員 600 名(12 学級)、定時制定員 160 名(4学級)
- 平成 23 年(2011 年) 全日制課程理数科(科学探究科)設置、全日制課程普通科の定員
280 人(7学級/学年)、全日制課程科学探究科の定員 40名
(1学級/学年)
- 平成 25 年(2013 年) 文部科学省による SSH(スーパーサイエンスハイスクール) I 期
の指定
- 平成 30 年(2018 年) 文部科学省による SSH(スーパーサイエンスハイスクール)第Ⅱ期
の指定
- 令和4年(2022 年) 定時制課程閉課程
- 令和6年(2024 年) 文部科学省による SSH(スーパーサイエンスハイスクール)第Ⅲ期
の指定

静岡市立清水桜が丘高等学校

静岡市立清水商業高等学校

- 大正 11 年(1922 年) 静岡県清見瀧商業学校(6町村組合)として開校
- 大正 13 年(1924 年) 市制施行により清水市立商業高等学校に改称
- 昭和 23 年(1948 年) 定時制課程設置
- 昭和 25 年(1950 年) 男女共学となる
- 昭和 54 年(1979 年) 定時制課程閉講
- 平成 15 年(2003 年) 静岡市立清水商業高等学校に改称

静岡県立庵原高等学校

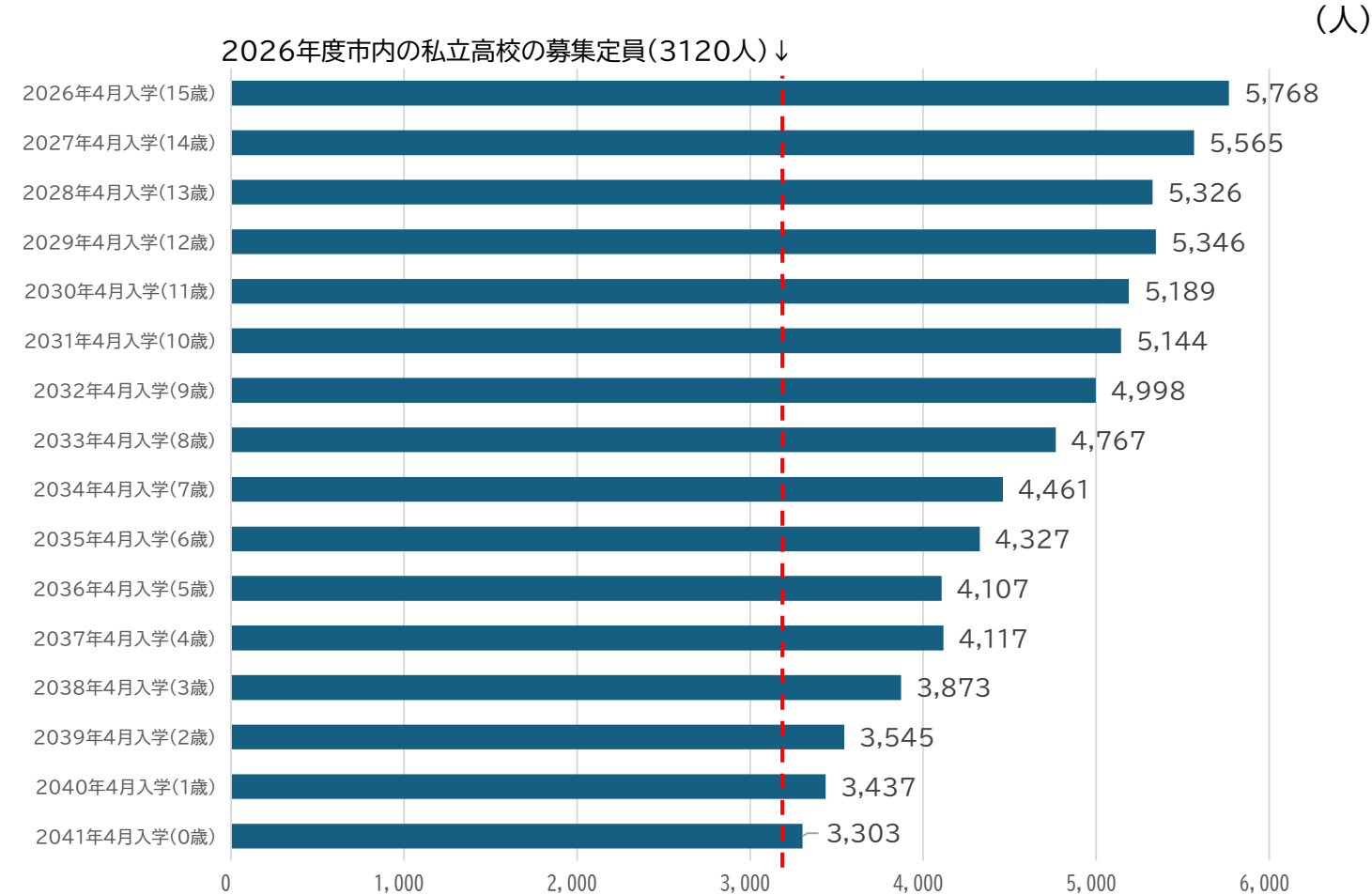
- 昭和 54 年(1979 年) 第二次高校生急増対策「高校新設後期計画」により設置が決定
- 昭和 56 年(1981 年) 開校(普通科と英語科を設置)

- 平成 25 年(2013 年) 静岡市立清水桜が丘高等学校 開校(静岡市立清水商業高等学校
と静岡県立庵原高等学校との再編整備)

2 公立高校を取りまく状況と将来

2-1 市内の高校生の人数減少

静岡市の将来の高校1年生人口推定（2026年3月末速報の年齢別人口より）



※()の年齢は、2026年3月末時点の年齢

静岡市の最新の人口データ（2026年度末の速報）を見ると、子どもの数が減少していくため、近い将来、今ある高校の数や規模をそのまま保つのが難しくなる。

私立高校の募集定員を現状のままにすると、2041年には私立高校の定員数と入学者数がほぼ同数となる。

現在、市立2校合わせて1学年合計14学級（静岡市立高が8学級、清水桜が丘高が6学級）ある。これから生徒の数が減少していく中で、市立2高校だけを県が示す適正規模（1学年6～8クラス）のまま、魅力ある学校として維持していくことは、現実的に不可能。

(仮定)

2026年3月末の年齢別人口が増減なく(転出入なく)時間の経過で推移していくと仮定。市外から静岡市に通学する人数は考慮しない。例えば、2026年3月末時点で0歳の3303人が、全員が2041年4月に高校に入学すると仮定。

2-2 市内の全日制高校の募集定員数シミュレーション

(あくまで、将来何か起きる可能性があるかを考えるための静岡市の仮試算)

2026年度市内の公立と私立の募集定員はそれぞれ、3,000人と3,210人、合計6,210人である。

総募集定員の合計を15歳人口減の割合に応じて減らしていくと仮定。

(例)2041年の総募集定員見込み3,556人は、2026年の募集定員(6,210人)×2041年入学人口(3,303人)÷2026年入学人口(5,768人) で計算

私立高校募集定員見込み(棒グラフの緑色部分)は、2041年/2026年比で、20%減、10%減で試算。

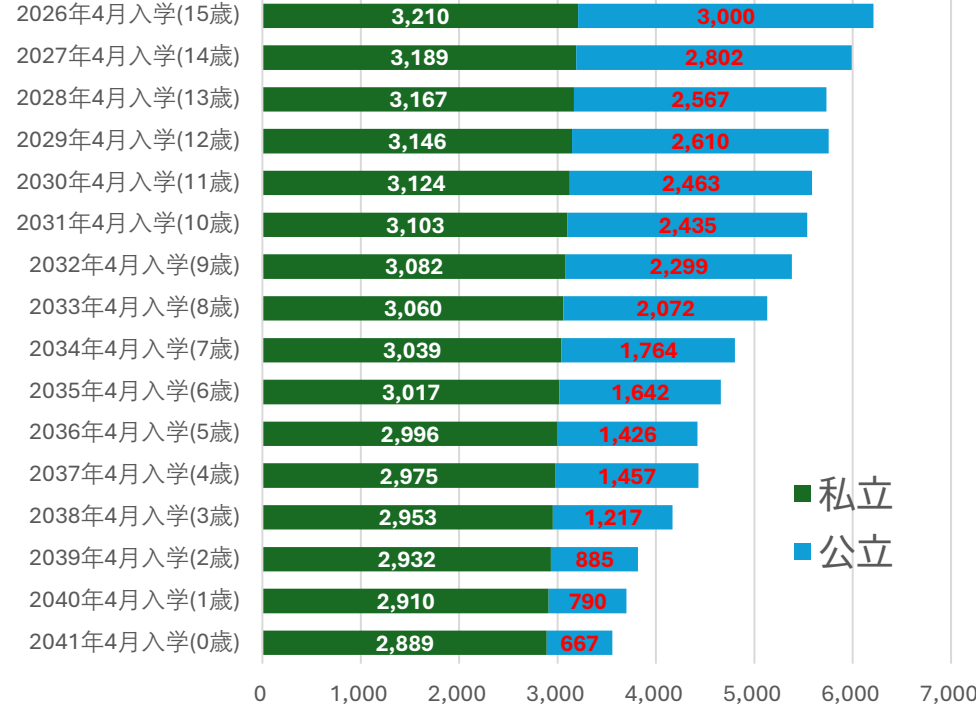
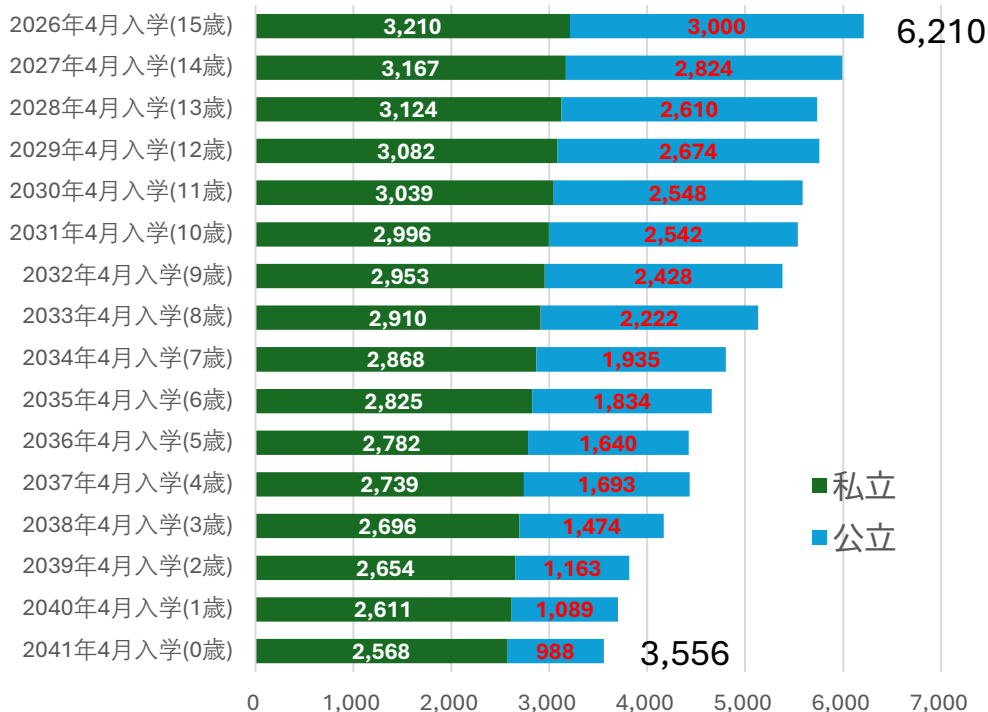
公立の募集定員見込み(棒グラフの水色部分)は、総募集定員数から私立高校の募集定員を引いた人数。

募集定員(人)

募集定員(人)

私立の高校が募集定員を15年間で20%減らすと仮定した場合

私立の高校が募集定員を15年間で10%減らすと仮定した場合



人口が減少する将来においても、私立高校の定員数はあまり減らない(10%又は20%減)とした場合、人口減による高校規模の縮小は主に公立高校の定員で調整されることになる。

(法律上、公立高校の配置及び規模の適正化に努めるにあたって、県は、私立高校等の配置状況を十分に考慮しなければならない。)

2-3 県内の設置区分別募集定員

【県内全日制高校の設置区分ごとの募集定員数（2026年度入学生）】

静岡市(下の表の清庵・静岡地区)においては、募集定員の合計に占める私立高校の割合が52%と他地区と比べ高く、また、市立高校の割合も9%と高いことが特徴

※()のパーセントは、当該地区の募集定員合計に対する割合

旧学区	県立	市立	私立	合計
賀茂地区	[4校] 280人 (100%)			[4校] 280人
田方地区	[9校] 1,475人 (60%)		[2校] 990人 (40%)	[11校] 2,465人
沼駿地区	[9校] 1,280人 (35%)	[1校] 200人 (5%)	[8校] 2,216人 (60%)	[18校] 3,696人
富士地区	[8校] 1,440人 (58%)	[1校] 240人 (10%)	[2校] 800人 (32%)	[11校] 2,480人
東部 計	[30校] 4,475人 (50%)	[2校] 440人 (5%)	[12校] 4,006人 (45%)	[44校] 8,921人
庵原・静岡地区	[11校] 2,440人 (39%)	[2校] 560人 (9%)	[13校] 3,210人 (52%)	[26校] 6,210人
志榛地区	[12校] 2,120人 (63%)		[5校] 1,240人 (37%)	[17校] 3,360人
中部 計	[23校] 4,560人 (48%)	[2校] 560人 (6%)	[18校] 4,450人 (46%)	[43校] 9,570人
小笠地区	[6校] 1,120人 (75%)		[1校] 375人 (25%)	[7校] 1,495人
磐周地区	[10校] 1,655人 (83%)		[1校] 330人 (17%)	[11校] 1,985人
西遠地区	[16校] 4,080人 (58%)	[1校] 360人 (5%)	[10校] 2,550人 (36%)	[27校] 6,990人
西部 計	[32校] 6,855人 (65%)	[1校] 360人 (3%)	[12校] 3,255人 (31%)	[45校] 10,470人
全県	[85校] 15,890人 (55%)	[5校] 1,360人 (5%)	[42校] 11,711人 (40%)	[132校] 28,961人

(出典) 令和8年度 静岡県公立高等学校生徒募集計画及び選抜定員に対する学校裁量枠の選抜割合(選抜段階)一覧 および 令和8年度静岡県私立高校入学試験志願状況

2-4 静岡市内の公立高校の志願状況

2024年、2025年の志願倍率は、清水桜が丘高と静岡市立高は厳しい状況であった。
 清水桜が丘高(2024年:0.94、2025年:0.99) 静岡市立高(2024年、2025年共に0.96)
 ただし、2026年の志願倍率は、両校とも改善している。

入学年度		R4年度 (2022)			R5年度 (2023)			R6年度 (2024)			R7年度 (2025)			R8年度 (2026)			学校名	学科名
学校名	学科名	R4 定員	R4 志願者	R4 倍率	R5 定員	R5 志願者	R5 倍率	R6 定員	R6 志願者	R6 倍率	R7 定員	R7 志願者	R7 倍率	R8 定員	R8 志願者	R8 倍率		
清水東	普通	240	246	1.03	240	253	1.05	240	249	1.04	240	261	1.09	240	231	0.96	清水東	普通
	理数	40	54	1.35	40	47	1.18	40	48	1.20	40	57	1.43	40	39	0.98		理数
	学科計	280	300	1.07	280	300	1.07	280	297	1.06	280	318	1.14	280	270	0.96		学科計
清水西	普通	200	125	0.63	160	150	0.94	160	162	1.01	160	173	1.08	160	143	0.89	清水西	普通
清水南	普通	120	(91)	(0.76)	120	(109)	(0.91)	120	(99)	(0.83)	120	(98)	(0.82)	120	(90)	(0.75)	清水南	普通
	芸術	40	(37)	(0.93)	40	(26)	(0.65)	40	(40)	(1.00)	40	(35)	(0.88)	40	(27)	(0.68)		芸術
	学科計	160	(128)	(0.80)	160	(135)	(0.84)	160	(139)	(0.87)	160	(133)	(0.83)	160	(117)	(0.73)		学科計
清水桜が丘	普通	120	130	1.08	120	148	1.23	120	125	1.04	120	114	0.95	120	126	1.05	清水桜が丘	普通
	商業	120	103	0.86	120	132	1.10	120	100	0.83	120	124	1.03	120	129	1.08		商業
	学科計	240	233	0.97	240	280	1.17	240	225	0.94	240	238	0.99	240	255	1.06		学科計
静岡	普通	320	384	1.20	320	365	1.14	320	378	1.18	320	362	1.13	320	419	1.31	静岡	普通
静岡城北	普通	200	266	1.33	200	245	1.23	200	221	1.11	200	245	1.23	200	191	0.96	静岡城北	普通
	グローバル(国際)	40	40	1.00	40	48	1.20	40	52	1.30	40	42	1.05	40	55	1.38		グローバル(国際)
	学科計	240	306	1.28	240	293	1.22	240	273	1.14	240	287	1.20	240	246	1.03		学科計
静岡東	普通	280	321	1.15	280	325	1.16	280	302	1.08	280	293	1.05	280	308	1.10	静岡東	普通
静岡西	普通	160	95	0.59	120	86	0.72	120	98	0.82	80	87	1.09	80	70	0.88	静岡西	普通
駿河総合	総合	240	254	1.06	240	236	0.98	200	216	1.08	200	247	1.24	200	197	0.99	駿河総合	総合
静岡農業	生物生産・生産流通	80	57	0.71	80	64	0.80	80	84	1.05	80	72	0.90	80	68	0.85	静岡農業	生物生産・生産流通
	環境科学	80	86	1.08	80	65	0.81	40	49	1.23	40	37	0.93	40	54	1.35		環境科学
	食品科学・生活科学	80	81	1.01	80	78	0.98	80	104	1.30	80	80	1.00	80	90	1.13		食品科学・生活科学
	学科計	240	224	0.93	240	207	0.86	200	237	1.19	200	189	0.95	200	212	1.06		学科計
科学技術	機械工学	40	28	0.70	40	41	1.03	40	38	0.95	40	31	0.78	40	45	1.13	科学技術	機械工学
	ロボット工学ほか	40	50	1.25	40	47	1.18	40	50	1.25	40	36	0.90	40	42	1.05		ロボット工学ほか
	電気工学	40	28	0.70	40	50	1.25	40	40	1.00	40	43	1.08	40	44	1.10		電気工学
	情報システム	40	80	2.00	40	62	1.55	40	66	1.65	40	56	1.40	40	75	1.88		情報システム
	建築デザイン	40	45	1.13	40	59	1.48	40	28	0.70	40	48	1.20	40	58	1.45		建築デザイン
	都市基盤工学	40	30	0.75	40	47	1.18	40	39	0.98	40	44	1.10	40	45	1.13		都市基盤工学
	電子物質工学	40	42	1.05	40	54	1.35	40	39	0.98	40	30	0.75	40	34	0.85		電子物質工学
	理工(理数科)	40	54	1.35	40	56	1.40	40	51	1.28	40	41	1.03	40	55	1.38		理工(理数科)
	学科計	320	357	1.12	320	416	1.30	320	351	1.10	320	329	1.03	320	398	1.24		学科計
静岡商業	商業	160	165	1.03	160	179	1.12	160	151	0.94	160	182	1.14	160	169	1.06	静岡商業	商業
	情報処理	80	62	0.78	80	76	0.95	80	56	0.70	40	41	1.03	40	25	0.63		情報処理
	学科計	240	227	0.95	240	255	1.06	240	207	0.86	200	223	1.12	200	194	0.97		学科計
静岡市立	普通	280	341	1.22	280	361	1.29	280	283	1.01	280	286	1.02	280	311	1.11	静岡市立	普通
	科学探究	40	54	1.35	40	37	0.93	40	25	0.63	40	21	0.53	40	28	0.70		科学探究
	学科計	320	395	1.23	320	398	1.24	320	308	0.96	320	307	0.96	320	339	1.06		学科計
市内公立の合計		3,240	3,349	1.03	3,160	3,446	1.09	3,080	3,193	1.04	3,000	3,186	1.06	3,000	3,168	1.06	市内公立の合計	

2-5 市内にある全日制高校の所在地



2-6 市内にある全日制高校（学科別）

【県立高校】

<普通科>

- ・静岡
- ・静岡東
- ・静岡城北
- ・静岡西
- ・清水東
- ・清水西
- ・清水南(中高一貫)

- <理数科> 清水東
- <国際・グローバル系> 静岡城北
- <芸術科> 清水南(中高一貫)

- <総合学科> 駿河総合

<専門学科>

- ・静岡商業
- ・科学技術
- ・静岡農業

【市立高校】

<普通科>

- ・静岡市立
- ・清水桜が丘

- <科学探究科>
- ・静岡市立

<商業>

- ・清水桜が丘

【私立高校】

<普通科>

- ・清水国際
- ・東海大翔洋
- ・静岡英和
- ・静岡女子
- ・常葉橘
- ・静岡学園
- ・静岡雙葉
- ・静岡サレジオ
- ・静岡大成
- ・城南静岡
- ・常葉
- ・静岡北
- ・聖光学院

- <理数科> 静岡北
- <英数科> 常葉橘
- <国際・グローバル系> 静岡北

<専門学科>

- ・清水国際(ITビジネス)
- ・城南静岡(ICT)
- ・静岡女子(家政・商業・福祉)

3 再編についての県の検討状況

3-1 静岡県の検討状況

静岡県教育委員会は、少子化や社会の変化に対応するため、2022年度に「静岡県立高等学校の在り方に関する基本方針策定委員会」を設置し、地域ごとの協議会や意見聴取を行いながら、学科再編や学校配置、教育内容などの議論を行っている。

〔以下の出典:静岡県教育委員会から提供〕

県立高等学校の在り方に係るグランドデザイン（清庵・静岡地区）

1 要旨

清庵・静岡地区の県立高等学校の在り方について、地域協議会での協議を踏まえ、グランドデザイン（案）を策定した。

○スケジュール

時 期	内 容
令和6年 1月24日	第1回県立高等学校の在り方に係る地域協議会（清庵地区）
7月16日	第2回県立高等学校の在り方に係る地域協議会（清庵地区）
12月24日	第1回県立高等学校の在り方に係る地域協議会（静岡地区）
令和7年 6月4日	第2回県立高等学校の在り方に係る地域協議会（静岡地区）
8月25日	第3回県立高等学校の在り方に係る地域協議会（清庵・静岡地区）
12月17日	第4回県立高等学校の在り方に係る地域協議会（清庵・静岡地区）
令和8年 3月16日	第5回県立高等学校の在り方に係る地域協議会（グランドデザインの検討）

2 グランドデザインの概要

「自分」「つながる」「未来」を軸に、生徒が自分と向き合い、他者や社会とのつながりの中で、新たな価値を創出する、学習者主体の学びを確立するための方策を示す

3-2 静岡県の検討状況

清庵・静岡地区〈公立高校〉のグランドデザイン

イメージ図

目指す人物像

自分の強みを生かし、社会とつながり、未来を創造する人

自分 自分の興味・関心に基づく、自己探究・自己形成の力

つながる 多様な他者と協働し、変化に柔軟に対応しながら課題を解決する力

未来 新たな価値を創出し、未来の社会づくりに参画する力

目指す学校像

以下の学びを複合的に展開

- 専門的な知識・技能を基盤に、自ら挑戦する学び
- 科学的・創造的な視点で探究を深める学び
- 多様な価値観を理解し、社会とつながる学び
- 学びや進路を自らデザインする学び
- 個性を生かし、他者と協働しながら未来を切り拓く学び

【教育基盤の整備】

- 安心・安全な学習環境の形成
- 学びを支える教員の育成
- 教育の質を確保するための適正規模（1学年6～8学級）

改編の方向性

- 教育の質の確保に向け、「市立の高等学校の在り方検討委員会」の検討結果等も踏まえて再編整備を実施
- 地区内公立高校を10校程度に段階的に集約
 - ・静岡西高校と清水西高校、また清水南高校（同中等部含む）については、速やかに個別協議を行い再編に着手
 - ・農業・商業・工業は、県内における拠点校としての役割を維持
 - ・その他の高校については、生徒数の減少状況や配置等を踏まえ、R20年度頃までを見据えた再編の方針を、R10年度までに公表

清庵・静岡地区〈公立高校〉のグランドデザイン

【課題認識 全県】

- 少子化が進行する中での高校の改革（配置と規模のあり方など）
- 変化の激しい時代を生き抜く力の育成

【課題認識 清庵・静岡地区】

- 人口減少が急激に進行し、R20 には市内中卒者数が約3割減
- 小規模化により学びの選択肢が制限される中、生徒ニーズは多様化
- 科学技術の進展や社会のグローバル化が進む中、生徒が将来を見据えた進路選択ができるよう、理系分野への関心を高める取組や、グローバル教育の推進が求められる

【高校改革の基本認識 全県】

- 行ける学校から行きたい学校へ、画一から多様へ（学びの変革）
- 地域・実社会と共にある学校（開かれた学校づくり）
- 時代の変化を踏まえた教育基盤（学校の配置・規模等）

【高校改革の基本認識 清庵・静岡地区】

- 県の中心拠点として、地域、国、世界とつながり、多様な場で活躍できる人材を育成
- 「自分」「つながる」「未来」を軸に、自分を起点に、他者や社会とつながりながら、未来を拓く学びを展開
- 教育の質を確保するため、学校規模の整備、教員の資質・能力の向上を図る学校体制を整える

【目指す人物像】

○自分の強みを生かし、社会とつながり、未来を創造する人

「自分」：自分の興味・関心に基づく、自己探究・自己形成の力
 「つながる」：多様な他者と協働し、変化に柔軟に対応しながら課題を解決する力
 「未来」：新たな価値を創出し、未来の社会づくりに参画する力

【目指す学校像】

目指す人物像の育成に向け、以下の学びを複合的に展開する学校とする

- 専門的な知識・技能を実社会の課題と結び付け、新たな可能性に挑戦する学び
- 科学的・創造的な視点で課題を捉え、論理的思考を軸に探究を深める学び
- 芸術・文化・国際的な視野を通して多様な価値観を理解し、社会とつながる学び
- 多様な選択の中で、学びや進路を自らデザインする学び
- 一人ひとりの個性を生かし、他者と協働しながら未来を切り拓く学び

【具現化のための方策】

【学びの変革のあり方】

- 「自分」
 - ・問いを立て、仮説と検証を重ねる探究的な学びの充実
 - ・ロールモデルに触れ、学びを実践へとつなげる機会の創出
- 「つながる」
 - ・多様な考え方に触れ、対話を軸に思考を深める学びの展開
 - ・社会や世界に目を向け、身近な課題に気づく学びの推進
- 「未来」
 - ・多様な学びや身近な事象を、科学的・論理的に捉え直すことで、見方・考え方を広げるカリキュラムの推進
 - ・自己の在り方を振り返り、次の挑戦に向かう未来志向の学びの構築

【地域との連携のあり方】

- 人と人がつながる学びの創出
 - ・地域の魅力を知る学びである「しずおか学」と連動した、幼・保・小・中・特との学びの交流
 - ・地域の人と共に活動し、支え合う経験を通して地域への愛着を育む実践的な学び
- 地域課題や、地域産業と関連付けた実践的な学び
 - ・地域の産業界、大学との協働によるキャリア形成
 - ・大学や企業等と連携した高い専門性を育む教育
- ICTを活用した、地域、世界とつながる取組
 - ・オンラインやAIを活用した共同研究・国際交流

【教育基盤のあり方】

- 安心・安全な学習環境の形成
 - ・多様な個を尊重し、対話と協働を基盤とした学びを支える学級経営の推進
 - ・学びの可視化による個に応じた学びと、協働的な学びを一体的に実現するデジタル学習基盤の整備
- 学びを支える教員の育成
 - ・理念を共有し、実現に向かう教員集団の形成
 - ・授業デザイン・カリキュラムの構築、生徒支援などの専門性を高める実践的な研修の実施
- 教育の質を確保するための適正規模（1学年6～8学級）
 - ・地区内公立高校を段階的に10校程度に集約

別紙

2040年（R22）を見据えた県立高校の未来 ～少子化を超えて生徒の学びの環境を確保するために～

直面する課題 ～少子化と学校の小規模化～

○県内においても、少子化が急速に進行しています。

静岡県の児童生徒数

(H1) 64万人

(R7) 35万人

➔

県内公立高校生徒数

(H1) 11万人

(R7) 5.5万人

○少子化に伴い、過半数の公立高校が適正とされる学校規模（6～8学級）を下回り、学校経営に深刻な影響が及んでいます。

5学級以下の
学校数・割合

(H1) 10校・10%

(R7) 58校・65%

学校規模の小規模化が教育に与える影響

○**教員数の減少**
学級数減と比例して配置される教員数も減少し、多様な科目選択や、生徒ニーズへの対応が困難になります。
*グラフは1学年の学級数ごとに配置される教員数を示しています。

○**教育投資の維持向上の困難**
将来に向けた新たな科目等の展開が難しく、また学校への投資の将来像も不明確となり、よりよい学習環境の実現が困難となります。

*教員数は、募集学級数に応じて「高校標準法」で決定

こどもたちの未来に向けて ～強化する役割と適正規模の確保～

○地域の意見も参考に、少子化の中でも教育の質を確保するための取組を、将来にわたって進めます。
(例) 学科・学校間を超えた連携、遠隔教育（ICT）、地域・企業等との連携、教科横断的学び、単位制高校…

○少子化や私学との「共存・役割分担」の観点から、県立高校について再編を加速し、今後、特に以下の役割を強化します。

①グローバル・グローバルリーダー育成

②実学系教育の充実

③多様なニーズへの対応とエンパワーメント

④教育空白域の回避

○適正規模の確保と予算・人員の集中投下により、充実した教育環境を実現します。
【参考：生徒一人当たりコスト】
7学級のA校：729,685円
1学級のB校：1,842,531円
→同じコストなら適正規模校の方が教育の質が高まる

老朽化した校舎

長寿命化改修+新築

○（参考）適正規模の維持に必要な学校数（生徒数の減少予測等を踏まえた現時点の試算）

現状
89校

➔

2040年
50～60校程度

R7.12 静岡県教育委員会

19

3-5 静岡県教育委員会が公表している再編計画 静岡地区の再編(14校→10校)

生徒数の減少予測等を踏まえた現時点の試算として

(全県) 現状 89校 ⇒ 2040年度 50～60校程度

[出典:2040年(R22)を見据えた県立高校の未来/R7.12 静岡県教育委員会]

(静岡市内) 現状 14校 ⇒ 10校程度に段階的に集約
まずは適正規模を下回っている学校から速やかに個別協議を行い再編に着手

[出典:清庵・静岡地区〈公立高校のデザイン〉のグランドデザイン(案)/第5回県立高等学校の在り方に関わる地域協議会資料]

[静岡市の考え]

県が全体数を減らす中で、市立高校だけを2校維持し続けることは、地域全体の最適化を阻害することにもなりかねない。県と歩調を合わせ、市としても能動的に規模の縮小に協力する必要がある。その際には、どういう学びの学校(どういう学びの保障)を市として持つべきか考えることが必要。

3-6 市立高校の再編等に関する他都市の動き

全国的な少子化の進行を受け、静岡県内のみならず他都市においても在り方の見直しが行われている。

【政令指定都市】

【大阪市】 2022年4月に大阪府へ移管(役割分担の明確化: 高校教育は大阪府、義務教育は大阪市)

【札幌市】 市立札幌藻岩高校と市立札幌啓北商業高校を1校に再編 (2027年4月開校予定)

【福岡市】 市立博多工業高校を学科改編(2027年度)、市立福岡女子高校を共学化(2027年度から)

【京都市】 市立塔南高校の施設老朽化に伴い、洛陽工業高校跡地へ移転・再編 (2023年4月開校)

【北九州市】 所管する1校において、情報ビジネス科と普通科を再編→未来共創科の開設(2025年度から)

【その他の都市】

【姫路市】 市立3校(姫路高等学校、琴丘高等学校、飾磨高等学校)を1校(姫路市立高等学校)に再編統合
(2026年4月)

4 市立の高校の在り方についての市の検討経緯と考え方

4-0 市立の高校の在り方についての検討を開始した理由(総括)

(社会背景)

- 県全体の公立高校の志願倍率が2026年度(注)は、1を割った。(注2026年度入学者)
- 2026年度からの私立高校の完全無償化で、私立高校の志願が増加する見込み
- 今後、高校生人口の減少が続く。
- 高校生人口の減少による公立校の在り方を考えるにあたっては、静岡市は私立高校の定員数が高いことを考慮することが必要。
- 静岡県も2023年1月 静岡県立高等学校の在り方に係る地域協議会(清庵地区)、2024年12月に同(静岡地区)を設置し、清庵地区・静岡地区の県立高等学校の在り方について検討を開始した。

⇒ 静岡市も市立の高校の在り方について、設置者として県が高校の全体数を減らす中で静岡市も県の考えに従って数を減らすという受動ではなく、市として能動的に検討し、市立の高校の在り方を県に提案することが必要。その上で、市は県と歩調を合わせ、規模の縮小に協力する必要がある。

県のグランドデザイン(案)の再編の方向性において、以下のことが記載

教育の質の確保に向け、時代の変化に迅速かつ柔軟に対応した再編整備計画を「市立の高等学校の在り方検討委員会」の検討結果を踏まえて実施

4-1 市立の高校の在り方についての検討の経緯

★2025年3月28日 市長定例記者会見

静岡市の地域特性を生かした特色ある学校として、2050年までの人口推計を踏まえ、市立2高校(静岡市立高校と清水桜が丘高校)の在り方について、有識者や学校関係者等の外部の意見を取り入れながら検討を開始する。

★静岡市立の高等学校の在り方検討委員会(全面公開)

第1回 (4/28)

第2回 (6/18)

第3回 (9/9)

第4回 (11/12)

第5回 (1/21)

静岡市立の高校「新しい学校の姿」に関するアンケート実施 (12月)

各回終了後、教育委員会協議会にて報告一年間、外部有識者と共に検討を進め、「新しい学校の方向性」について結論を出した。

★2026年2月4日 検討委員会から教育長に「提案書」が手交される

★提案書を基に、市長部局・教育委員会で「新しい学校の方向性」について意思決定

★2026年3月24日 教育委員会定例会

★2026年3月31日 市長・教育長臨時記者会見

提案書の提言に基づき、市として決定する「新しい学校」の方向性
(1)「新しい学校」における人材育成、学校像、中核となる学び
(2)「新しい学校」の設置形態
(3) 将来の設置方向性



4-2 静岡市立の高等学校の在り方検討委員会における検討

将来に渡り、市立の高等学校が未来の静岡の創り手を育む場であり続けるためには、これまでの延長線上で考えるのではなく、時代の変化を認識して、特色ある、魅力ある高校としてのあるべき姿、望ましい姿(2高校の在り方)を描くべき時期にあると考え、検討を開始することにした。

【検討委員会の概要】 ※検討委員会は公開形式で実施

検討する事項	(1) スクール・ミッションおよびスクール・ポリシーに基づく魅力ある学校づくりの推進状況 (2) 従来の高等学校という既存の枠組みにとらわれない、新しい学校(高校)の姿 (3) 新しい学校(高校)の規模
設置期間	2025年4月～2026年3月の1年間
実施回数・時期	5回実施(各回2時間程度) 第1回4月28日 第2回6月18日 第3回9月9日 第4回11月12日 第5回1月21日

【検討委員】

氏名	役職	該当枠
さの ふみこ 佐野 文子	静岡県総合教育センター 教育主任 (静岡県の公立高校の元校長)	学校経営に関し優れた識見を有する者
しむら たけかず 志村 剛和	常葉大学 法人本部 指導主事 (静岡県の公立高校の元校長)	学校経営に関し優れた識見を有する者
たかはた さち 高畑 幸	静岡県立大学 教授	学識経験を有する者
みぞかみ しんいち 溝上 慎一	学校法人桐蔭学園 理事長 桐蔭横浜大学 教授	学識経験を有する者
むらやま いさお 村山 功	静岡大学 教授	学識経験を有する者

(五十音順、敬称略)

第1回検討委員会 (令和7年4月28日)
目的・背景の共有、及び、在り方検討の視点、検討プロセス等についての協議

【委員からの意見】

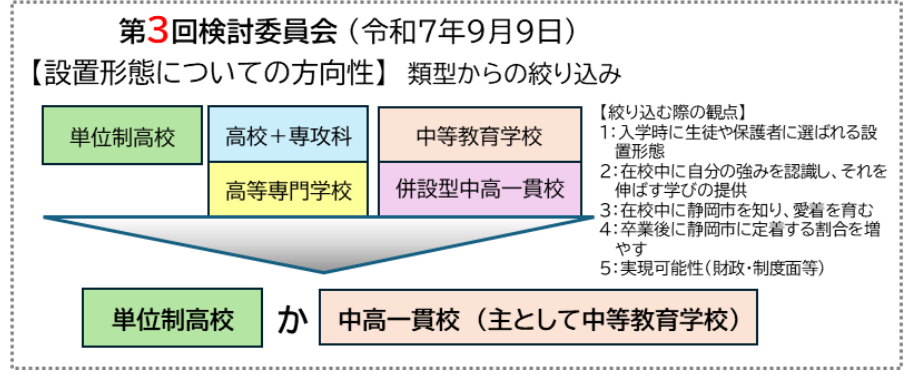
- 市立の高校の成り立ちを踏まえ、県立でまかなえない人数を埋めるだけなら県立だけでよい
- 市と県が連携しつつ、静岡市独自の教育の枠組みと方向性を明確にすべきである

第2回検討委員会 (令和7年6月18日)

- (1) 静岡市が高校を持つ意義
- (2) 「新しい学校の姿」の市のビジョン(案)
- (3) 運営体制の改善策

【委員からの意見】

- 静岡市と県教育委員会の方向性をすり合わせ、教育政策の整合性を確保すべきである



第4回検討委員会 (令和7年11月12日)

- (1) 規模について
- (2) 「新しい静岡市立の学校」での中核となる学びについて
- (3) 意見集約(提案書)について
- (4) アンケート調査の実施について

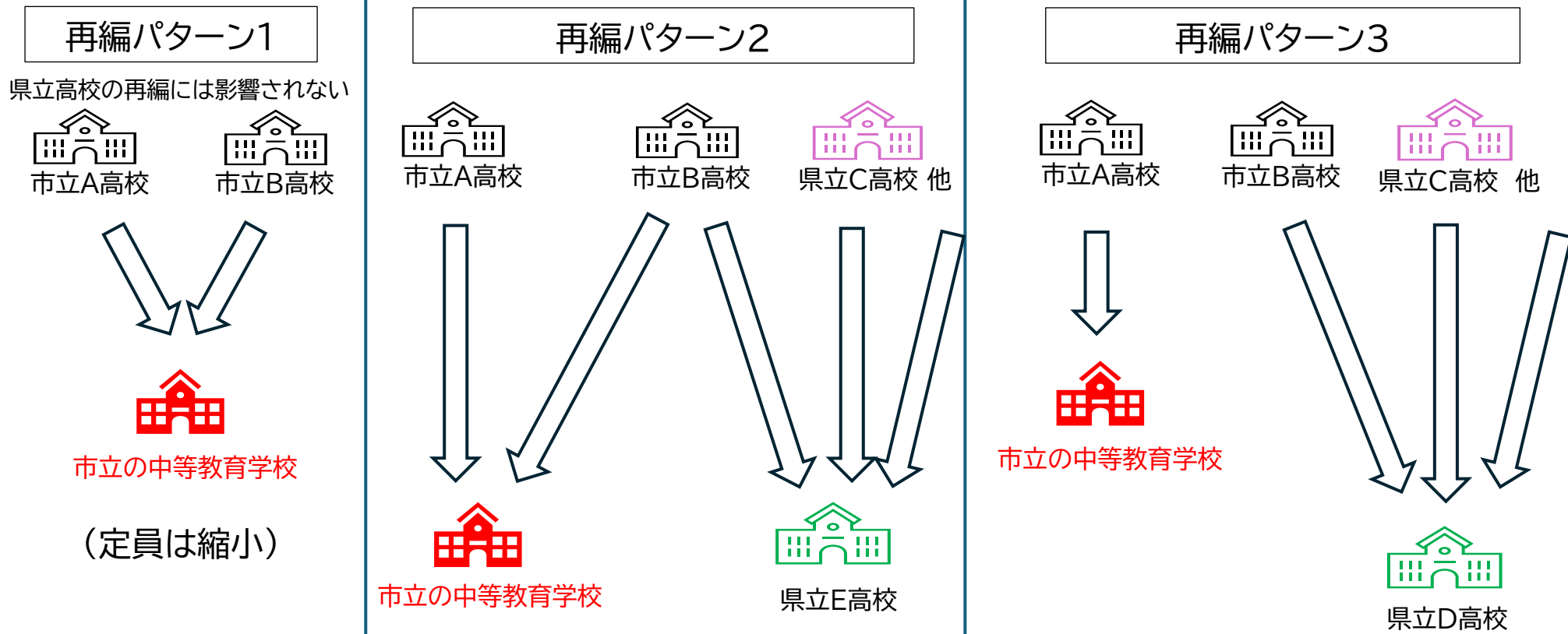
2つの設置形態(単位制・中等教育)を保護者がどう捉えるか、委員にウェブアンケート(案)を提示

第5回検討委員会 (令和8年1月21日)

- (1) これまでの振り返りについて(共有)
- (2) アンケートの実施結果について
- (3) 提案書(最終案)の検討及び決定について

中等教育学校 + 後半 単位制とした

4-3 現在の市立2高校の再編と県立高校の再編の関係



他にもいくつかのパターンは考えられるが、どのパターンをとるにも、県との協議・連携が不可欠

(1)再編する方法について

市としては、県が定める公立高校の配置や規模の適正化の枠組みの中で、2026年度1年をかけて、県との調整を行いながら、最適な再編の方法、計画を検討する。

(2)再編時期について

新しい学校の開校年度については、準備期間等を考慮すると最短では2030年が想定される。実際には県と再編の方法やスケジュールを調整する必要があるため、現時点で開校年度は未定。

4-4 高校から中等教育学校に移行する際の入学・進級状況(静岡市の1つの想定)

完成年度

学年 \ 年度	開校 3年度前	開校 前々年度	開校 前年度	中等教育 開校年度	2年目	3年目	4年目	5年目	6年目
中等 1年	準備期間	教育内容 の周知	入試	入学	入学	入学	入学	入学	入学
中等 2年					進級	進級	進級	進級	進級
中等 3年						進級	進級	進級	進級
高校 1年	入学	入学	入学	入学 定員1/2	入学 定員1/2	入学 定員1/2	中等 4年 進級	中等 4年 進級	中等 4年 進級
高校 2年	進級	進級	進級	進級	進級 1/2	進級 1/2	進級 1/2	中等 5年 進級	中等 5年 進級
高校 3年	進級	進級	進級	進級	進級	進級 1/2	進級 1/2	進級 1/2	中等 6年 進級

あくまでも一つの想定である

※「入学定員1/2」の1/2は確定事項ではない(これまでより定員を減らす必要があるということ)。

※高校の募集をいつまで続けるかも今後検討が必要

5 今後の具体的な検討の進め方

- ・ 2026年度より、静岡市教育委員会は、静岡県教育委員会との協議・調整を開始する。
- ・ 県が今後公表する公立高校の再編計画と歩調を合わせ、地域全体の教育環境の最適化を目指した「新しい学校」の具現に向けた検討を行う。
- ・ 2026年度に議論・協議・調整を重ね、2027年3月を目途に具体的な方針を公表する予定。

●基本方針

●校地の選定：

地域との繋がりや施設環境の将来性を最大限に活かせる場所について検討。

●募集定員、開校時期、および移行計画(★)：

現在の高校と新しい学校が一定期間共存し、在校生が最後まで安心して充実した学校生活を送れるよう、円滑な移行計画について検討。

●教職員の最適な配置および育成体制(★)：

新しい教育課程を支える教職員の配置や、質の高い指導体制の構築について検討。

●校地として使用しない場合の高校の施設や跡地の利活用(★)：

それぞれの学校が地域の歴史を刻んできた大切な場所であることを踏まえ、地域に貢献する新たな価値の創出について検討。

●基本計画の策定、教育課程、学校行事、運営体制、その他施設面の修繕等：

中等教育学校としての特色を最大限に引き出すための具体的な運営基盤について検討。

★印は、市としての方針を固めた上で、静岡県教育委員会と協議・調整する項目

(参考) 高校教育についてのアンケート (学科選択)

高校で学びたい学科は、「普通教科を学びつつ、一部、自分の興味がある特色のある分野での学習ができる普通科(32%)」、「普通教科と専門教科を自分の進路(興味)に合わせて選択できる総合学科(15%)」の2つが率が高い。したがって、中等教育学校(後期課程は単位制)はアンケート結果と適合している。

Q 高校ではどのような学科で学びたいですか(単一回答) (中学生および中学生保護者)

【高校教育についてのアンケート】

回答の選択肢	中学生		中学生保護者	
	人数	(%)	人数	(%)
難関大学への進学を目指す普通科(特別進学コースなど)や理数科	174	(9%)	110	(11%)
大学・短大等への進学を目指す普通科	571	(29%)	242	(24%)
普通教科を学びつつ、一部、自分の興味がある特色のある分野での学習ができる普通科	636	(32%)	285	(28%)
普通教科と専門教科を自分の進路(興味)に合わせて選択できる総合学科	292	(15%)	262	(26%)
専門的な学習ができる芸術科、商業科、工業科、農業科などの専門学科	290	(15%)	86	(8%)
身の周りで起こる物事から自ら課題を見つけて探究していく学びに特化した探究科	6	(0%)	20	(2%)
上記以外の学科	29	(1%)	11	(1%)

中学生・保護者ともに、進路希望に合った特色ある学びを求める傾向がみられる。

Q 現在、学んだり、取り組んだりしていることで興味あることは?(複数回答) (高校生)

回答の選択肢	高校生	
	人数	(%)
普通教科の学習	749	(45%)
進路を踏まえた専門的な分野の学習	517	(31%)
生徒会活動	60	(4%)
部活動	795	(48%)
総合的な探究の時間などに取り組む探究活動	119	(7%)
地域貢献活動やボランティア活動	79	(5%)
学校外での習い事	114	(7%)
その他	45	(3%)

高校2年生の5月は3年生から部活動のリーダーを引き継ぐ時期でもあり、意欲をもって取り組んでいる生徒が多いことが伺える。学習にも意欲的に取り組んでいる。

(参考)

静岡市立の高校「新しい学校の姿」に関する アンケート結果について【報告】

期間 : 2025年12月1日(月)~12月14日(日)
 対象 : 市立小中の保護者(小1~中2)
 方式 : Webアンケート (非記名、選択式、自由記述は任意)
 目的 : 検討委員会で提案された設置形態(方向性)に対して、近い将来、お子様が高校生(中学生)になる保護者のみなさまの意見を伺いたいと考え実施(設置形態について検討委員会の方向性と将来世代の生徒保護者の考えに乖離がないか確認するため)

回答数 : **n=8,135** 【児童・生徒数(回答者の子供の人数合計)ベースでは、11,054 (29.7%)】

🎯 肯定的な回答数・割合 (十分候補になる、そのような選択肢があってもよい)



設置形態について検討委員会の方向性と将来世代の生徒保護者の考えに乖離は小さい

(次ページへ続く) 30

(参考) Q4. 「中等教育学校」の設置について **必須**

検討委員会では、「将来の静岡市立の新しい学校」として、中高一貫校、特に中学と高校を合わせた6年制の「中等教育学校」(イメージ図参照)が提案されました。お子様の進路先として、候補になり得るか等の意見について、次の選択肢から1つだけ選んでください。(中学生の保護者におかれましては、お子様が小6だったと仮定してお答えください)

選択肢	回答数	割合
1 十分候補になり得る。	2,471	30%
2 通常の公立中学校への進学が基本であるが、このような選択肢があってもよい。	4,866	60%
3 通常の公立の中学校、または私立中学校しか考えられない。	685	8%
4 その他	113	1%

【「その他」を選択した場合の自由記述 の主たる内容】

【肯定的(条件付き肯定)な意見】

- ◎ 選択肢の多様化への賛同(いろんなスタイルが良い、選択肢が増える、人口減対策)
- ◎ 通学手段・立地条件(スクールバス次第、自宅から近い、通学が負担にならないなら)
- 教育内容・進学実績の質(進学校としての実力、希望のコース、大学進学目的、魅力ある学校なら)
- 柔軟性(転編入・不登校対応、途中で編入可能か、オンライン学習、海外からの編入)
- 特別支援・インクルーシブ対応(支援級があるなら、情緒級の設置、発達障害への対応、手厚い支援があれば)

【中立的な意見・判断不可】

- ◎ 情報不足・イメージ困難(よくわからない、想像できない、判断材料がない)
- ◎ 支援級在籍等のため対象外感(支援級のため普通の高校は考えていない、対象外だと思う)
- 対象外(年齢・私立志向)(もう中学生、私立中のみ検討、既存校を検討、関係ない)
- ◆ 内容・詳細次第で保留(教員による、特色による、進学先による)
- * 制度の複雑さ・不明点(学区はどうなるか、仕組みが不明、レベルが不明)

【懸念されること】

- ◎ 早期決定への不安(12歳の壁、小学生での判断は早い、親のエゴ、成長による変化、適性判断への疑問)
- 環境の固定化・逃げ場のなさ(6年間同じ環境、人間関係の偏り、不登校時のリスク、途中で変えられない)
- ◆ 学力・競争心の低下(中だるみ、競争がない、学力が落ちる、受験は必要)
- * 選択肢の縮小・地域格差(公立進学の幅が狭くなる、清水区の高校減少、地元の高校を残して、地域から出る不安)

【否定的な意見】

- ◎ 制度への基本的反対(意義を感じない、公立に一貫教育は不要、期待していない)
- ◆ 不登校・環境不適合(不登校の子供には苦痛、公立には行かせたくない)
- * 既存校(市立・桜が丘) 存続希望(今のままで良い、市高を残して、現状の雰囲気が好き)

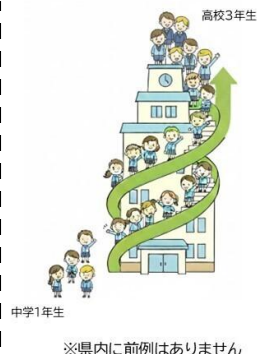
【批判的な意見】

- ◆ 教員の質・指導力への不信(教師の指導力不足、教員をどう育てるのか、現状の公立への不満)
- * 多様性の欠如(支援級等の排除、支援学校が選択肢にない、普通級前提の議論、弱者切り捨て)
- * デメリット・詳細の隠蔽(デメリットを書くべき、資料が乏しい、誘導的だ、急すぎる)

「中等教育学校」ってどんな学校？

～6年間同じ仲間・同じ方針で学ぶ学校～

【対象】
中学入学段階のお子さま



特徴

- ① 中高6年間で1つの学校で学びます(高校からの入学は原則ありません)
- ② 受験は中学入学時の1回だけ(高校入試はありません)
- ③ 中1から高3まで、一貫した教育プログラムでじっくり学力を伸ばします
- ④ 多様な個性や興味を伸ばす独自のカリキュラムが展開されます

メリット

- ① 6年間をかけて計画的に学べます
- ② 高校受験の負担がなく、課外活動や探究活動に集中できます
- ③ 異年齢の交流を通じて社会性が育まれます

意見の件数が多い順に
◎ > ○ > ◆ > *